

わたしのまちの景観

## 福岡市景観エッセー

景観に対する誇りや愛着を文章に託す「福岡市景観エッセー」の募集を97年度からはじめました。応募作品46点の中から選考委員会（福岡市都市景観審査委員会が兼ねる）に選考された4点をご紹介します。

LANDSCAPE FUKUOKA

第3  
福岡市景観エッセー



城南区役所から徒歩2分。高層マンションの谷間に「昔」に帰る不思議な空間がある。昭和初期に建設された6軒ほどの家には、漆黒の瓦と白い漆喰。夜の路地を丸太電柱の裸電球が照らしている。春はウグイス、夏はセミ、秋は虫の声が聞こえ、桜、ツツジ、椿の花々が路地を飾る。そして、その一角に私の家がある。

この環境を維持するのは金銭的にも心理的にも大変だ。壁板の土台の土壁や屋根の漆喰を修

### 「ほっ」とする瞬間のために

理できる職人さんは減少しているらしい。手入れを怠った木々は路地のごみ発生源になる。夏は家中の畳がダニの温床となり、冬には暖房が効かない。外観と居住性とは全く相反する。心のどこかに合理的で快適な生活空間の夢がある。季節ごとに会おう数多くの「ほっ」とする瞬間がその夢を忘れさせる。壁が風にそよぐ音。新緑の薄緑色。枕元の虫の声。冬の板塀の暖かさ。路地を通る人の心も穏やかなのだろう。

「ここで蝉を捕ったんだ」庭の手入れをしている私の耳に自慢げな幼児と父親の会話が聞こえてきた。小さな庭にいろいろな虫が棲めるように自然に近い環境を作る。落葉はごみにせず、山林のような落葉の層にする。

年齢を重ね、いつか、私も住居を壊し、合理的で快適な生活を選択するかもしれない。「自然を壊すな」「高層マンション建設反対」時々耳にするこれらの言葉が私を不安にする。何かに反対することは易しいが、土地を維持してきた人の苦勞を思うと、反対と声高に叫ぶことはできない。複雑な気持ちを抱えながら庭の土に向かう。

文化財に指定される価値もない、安らぎの空間。居住者の意識だけが支える空間。

「まだ、100年以上は使えるよ」訪問した友人の建築士が言っていた。数年後には、マンションの波が間近まで寄せてくるだろう。近隣家屋が変ぼうするのも時代の流れ。数年後の風景でさえ未知数の中にある。

原田久美子（城南区鳥飼）

自然の呼吸を遮断しない家。多少の不向きや不都合を乗り越えて、風や音や光の、空間の機微を受け止めながら古い家を大切に生きておられる姿が美しく伝わってきました。木と土と紙で出来た他に代えがたい空間を末水く守り育てていかれるよう心から祈ります。

（選考委員 中村善一）

